



ひみつなふたい

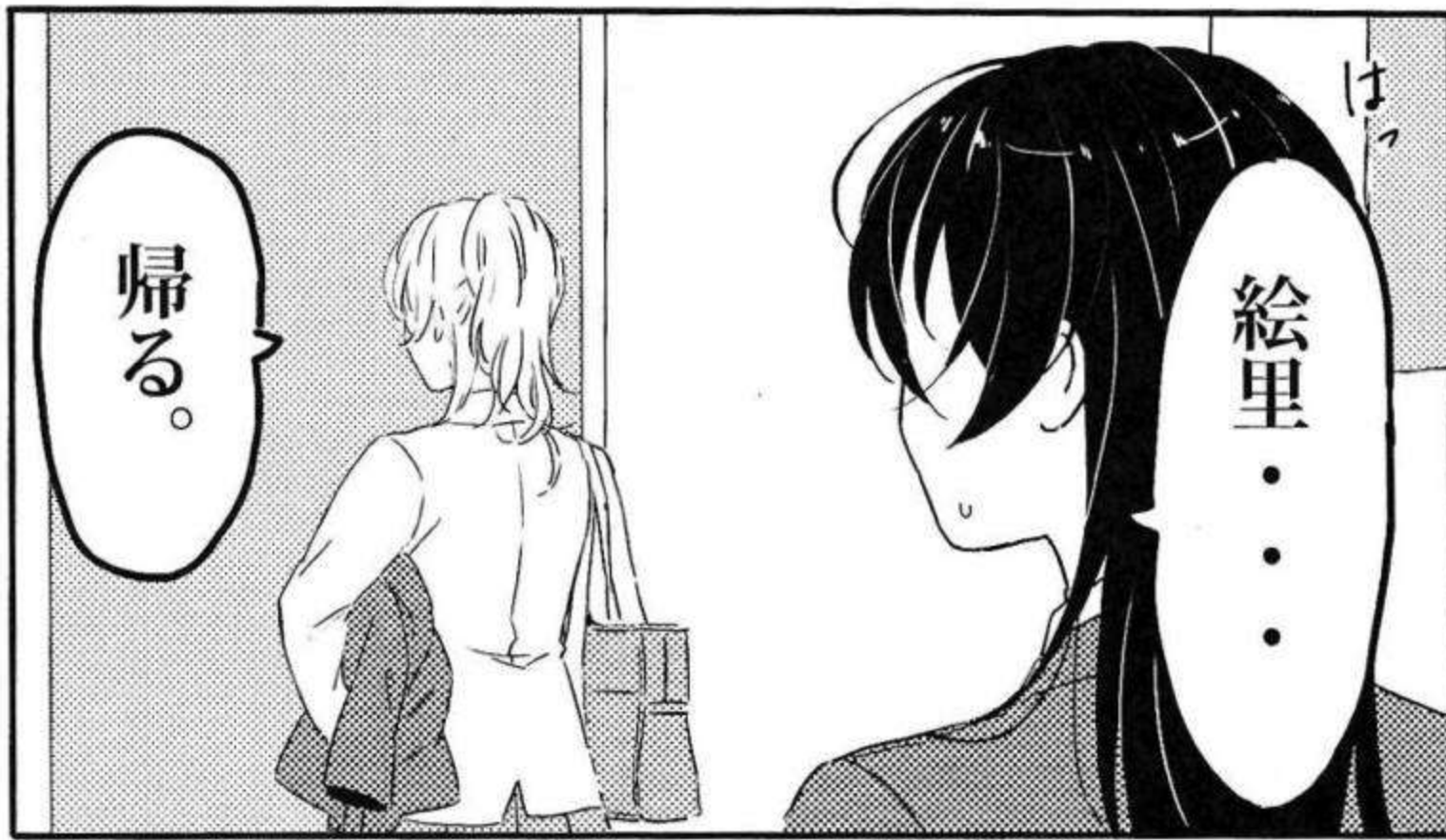
FOR ADULT ONLY







だめですっつてば!!!  
だっ...

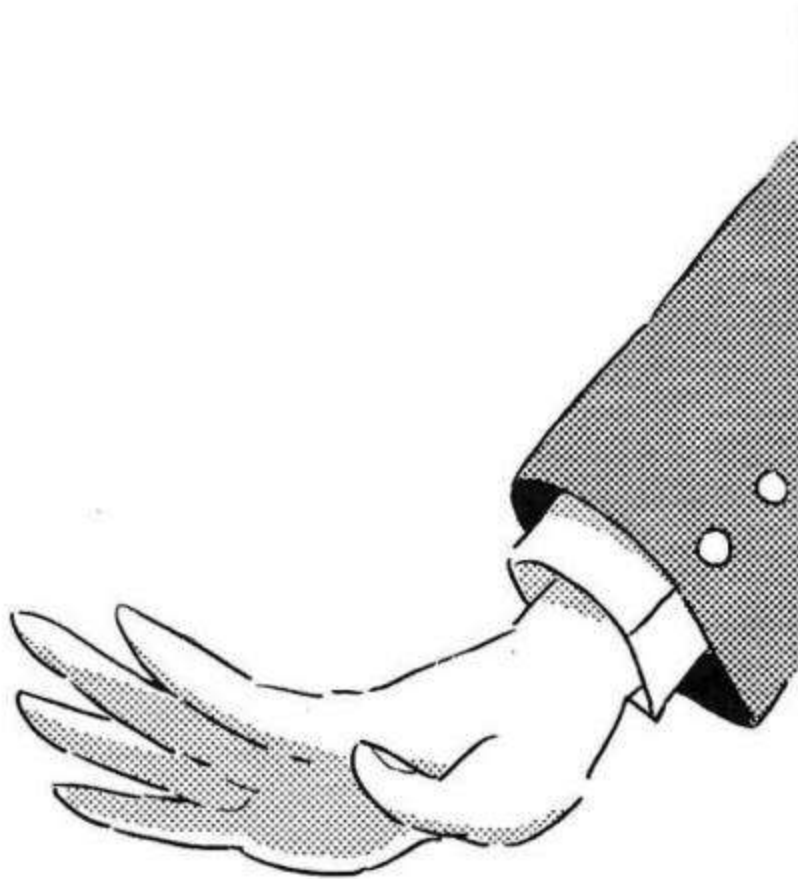


はっ  
絵里...

帰る。



カチン



ほんとへタレね







自分から誘っておいて



何を言っているのですか



あぢゅぽ

それはないでしょう。

ああ

そ...んな激しくっ

ちよ

だめっだめえ!!!

ちよ

ちよ

あっ...

はああっ...

もうイったのですか?

おっと...





まだこれからですよ？

キレッ！

ぞっ



う、うみっ  
わたしほんとに無理...

はあ

はあ

れろ



絵里のいやらしい声  
もつと聞かせてください。





ぐちゃぐちゃ

ガッ

海未っ...

はっ

だっ...め...

ガッぐちゃぐちゃ

ト〜ン〜ン〜ン〜ン〜ン〜ン

ぐちゃぐちゃ

うおっ

あっ

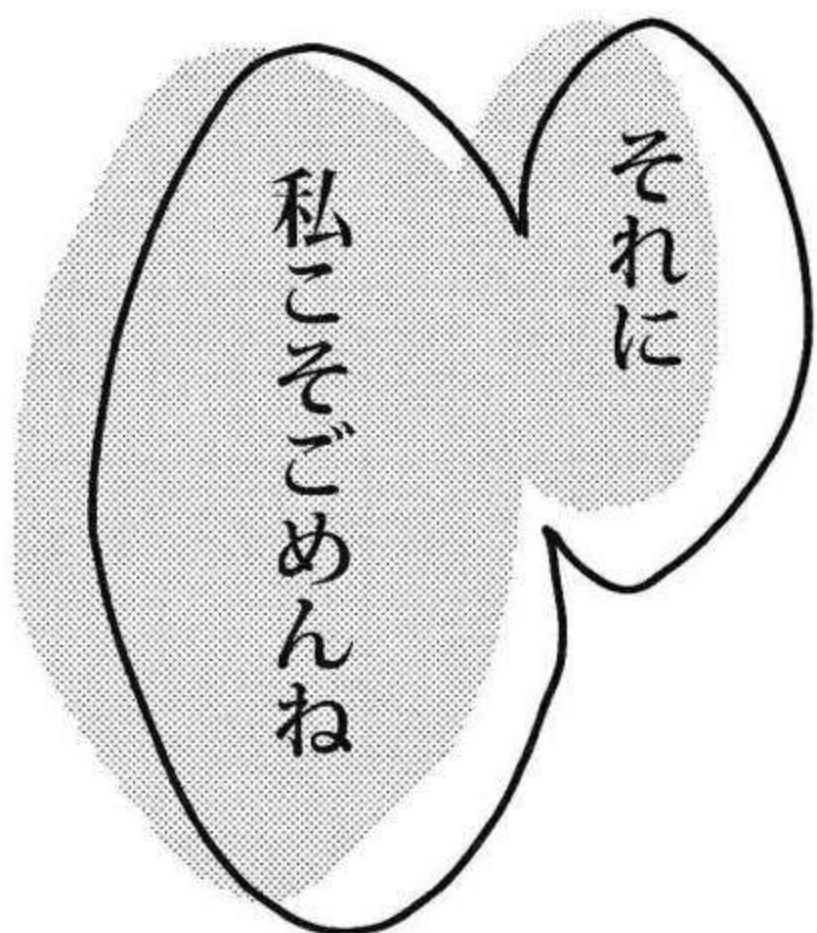
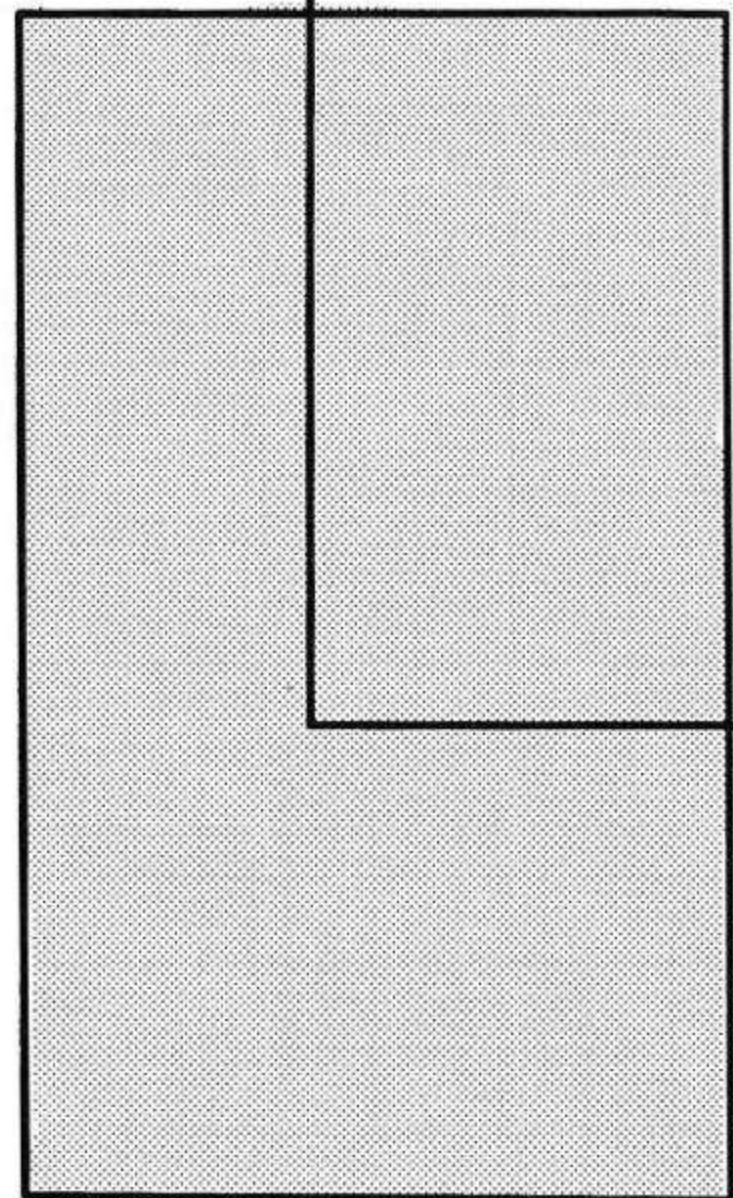
あっ

あああああ

あっはああっ

ビクンッ

ビクンッ





絵里  
・  
・  
・



ん  
ん



ほら、もう帰りましょ

だってえ

あああ

んん

ビエーっ

泣かないで

ちよっ



おわり♡



ぼんやりと朝の太陽が昇った空を眺めていた。太陽は私なんかよりもっともっと早起きで、みんなが起きる空をオレンジ色に染めて、私たちの起床を待つてくれているわけで。

眠たい、と思う。それでも眠いものは眠いわけで。昨日の夜更かしがたたったな、なんて思いながら、朝練を終えてそそくさと片づけをするサッカー部やらテニス部やらに朝からご苦労様ね、なんて心の中でいたわりの言葉を並べてみた。

ホームルームが始まるまであと五分と言ったところだろう、クラス内へと視線を戻せば、続々とクラスメイトが集まって来ていて、みんな遅刻ギリギリだなあと思う。私は遅刻なんて情けないことにはなりたくなくて、いつも少し早く来る。ギリギリになって走るなんて嫌なもの。教室はホームルーム開始時刻の十分前にならないとガラガラで。そこからぼつらぼつらみんながやってくるの。

「えりちおはよう」

「おはよう希」

希もいつもギリギリにやってくる。相変わらず遅いわね。希はいつものことやん、といまさら何言ってるのと言いたげな目で私を見る。ちよつとそう思うただけよ。返した言葉を希は特に問い詰めたりしなかった。そういえば、なんてお弁当の袋を横にかけながら希が席に着く。なに？と言ええりちも気になってるんやろ？と笑った。ばれている。

朝からその案件でそわそわして、空を眺めていたなんて知らないだろ

うけれど、気になっているのはお見通しなよう。

だって仕方ないじゃない。きつと今日このクラスの全員が同じことを気にしているはずだわ。

「美人系らしいで」

何故かこそごとと耳打ちをする希のトーンに合わせて、小声で美人系？と問い返す。さつき廊下で喋っている女の子がいたんや、なんて希は笑って、私はそうなの、と相槌をうった。美人系。そっか。楽しみかもしれない。希もきつと楽しみなのだろう、彼氏いるんかな？なんてのんきなことを考えている。

新年が明けて、最初の登校日。希とは年が明けてから遊んだから別に今年になって初めて会うわけではないのだけれど。担任の女の先生が産休をとって、年明けの1月、つまり今日から臨時の先生がやってくることになったのだ。普通副担任が担任だったりしないのかな、と思ったのだけれどどうやらそういうわけでもないらしい。新しい先生がどんな人なのか、そんなことがみんな気になって。チャイムが鳴ると同時に入ってくる生徒は今日はいなかった。

しんとする教室。少ししてざわつき始める。「こなくない？」「初日から遅刻？」「さつき見たつて人がいたよ」そんな会話が広がる。希も来ないなあ、なんて私の背中を指でつくものだから、やめてよと振り返ったらくすぐりたい？と笑った。

ガラスと扉が開く音がした。

騒がしかった教室は一瞬でしんとする。かつん、と一人の女の人が入ってくる。黒いスーツに、青みがかつた黒髪をひとつに結んだ人が、教室の中へと足を進める。真面目そうな人だなあ、と最初に見て思った。

「みなさんおはようございます。今日から3組の担任を務めます園田海未です。よろしくお願ひします」

黒板にかつかつと音を鳴らせて自分の名前を書き込んでいく先生の後姿を眺める。細くて折れそうな華奢な背中だった。書かれた文字は読みやすい綺麗な文字。書道か何かしてたのかなって思うくらいに。先生が名前を書き終えて頭を下げた。

自然と、拍手が沸き起る。何の拍手なのかわからないけど、みんなに合わせて手を叩けば、それまでずっと固まった、きっちりとした表情を崩さなかった先生が、ふにやりと笑った。思っていたよりもずっと幼い笑顔を浮かべて、照れくさそうに笑った。それでは、と先生が出席をとります、と名簿を取り出した。

「絢瀬絵里さん」

「はい」

先生がこちらを見る。につこりと微笑まれて、こくりと息を呑んだ。一人一人と目を合わせて、名前と顔を照らし合わせるように確認していく一生懸命さが伝わってきて、なんだかちよつとくすぐったく思った。全員の名前を呼び終えて、先生がもう一度よろしくお願ひしますと言って、ホームルー

ムは終わった。各々が始業式の準備を始める中、先生は教室を出ていく。綺麗系と聞いていたけれど、結構可愛かったと思った。

「なあなあ、可愛かったなあ園田先生！」

「そうね」

にこにことうれしそうに私にそう言う希にこくくと頷く。やっぱり同じこと思ってたのねと言えりちも？なんて笑って。ただ普通に、可愛らしい人だなと、そう思っただけ。

\*

学級委員の私が、園田先生と接触する機会はとても多かった。最初は前の先生がどんな感じだったか、から始まったと記憶している。

勉強熱心な先生だった。いつだって持ち歩いている書類の量はとても多かったし、自己紹介カード、を書かされたことがあったけれど、あれも最初のうちはずっと持ち歩いているみたいだったし、生徒一人一人に声をかけることを忘れない。そんな先生に少しずつ、ちよつとずつ私はこころを引かれていて。間違いなく、その真剣な眼差しに射抜かれていて。

国語の授業がある日は、朝いつもより目覚めがよかつたり。遠くで先生を見かけるだけでうれしくなったり。廊下で話しかけられるとその日はこころが浮かれてしまつたり。そんな私にきつと鋭い希は気付いているのだからけれど、彼女は何も言わなかつた。



「園田先生放課後空いてますか？」

「どうしました？」

「ちよつと学級新聞の文章を見てほしくつて」

わかりました、と忙しいのに笑つて快諾してくれる先生の優しさに甘えたのは愚かな一人の生徒。肩書きを利用して、仕事の相談、と声をかけたことももう数えきれないほど。学級新聞なんて、できましたつて提出するだけだったのに、今ではこうして提出する前の推敲を言い訳にして、今までよりも時間をかけて作っている。女々しいなんて言われてしまえば終わりね。

「放課後、先生に新聞見てもらおうから先帰つていいわ」

「わかつたくえりち最近園田先生とよくしゃべるなあ」

仲良しやん、と希が私の肩を叩く。痛いわね、と笑つたらごめんごめんなんてへらつとして。仲良しに見えるなら、嬉しいな、なんて。別に好きになつたからと言って、何かが変わるわけでもないし、そんなことを望んでいるわけでもないから、それだけで満足だつて。そう思っていたのだけれど。

「ごめんなさい、絢瀬さん、今日職員会議が入つてしまつて…別の日でも大丈夫ですか？」

「あ、終わるまで待つてます」

昼休みに、先生が教室へやつてきて、そう言った。

何時に終わるかもわからないのに、と待つていると言つた私を制するように先生が言うけど私は譲らなかつた。だつて放課後また一緒にいられると思つたのにやっぱりなしなんてそんなのさみしいじゃない。嫌よ。子供みたいだけど、必死に隠して、暇なので、なんて笑つて見せて。先生は困つたように頷いて、でも5時になったら帰つてくださいねつて言うからとりあえず頷いた。よかつた、それでも帰れと言われなくて。心の底からほつとした。これで帰りなさいと言われていたらさすがに心が折れていただろう。

「えりちも意外と強引やんね」

「なんのこつよ」

「なんでもなあい」

くすくすと希が楽しそうに笑うから、居心地が悪いつたらありやしない。もう、と頬を膨らませながら、卵焼きを口の中に放り込む。そんな目でもないですよ。

「でも園田先生もまんざらでもないみたいやしさ…なんか仕掛けてみてもいいんちゃう？」

「仕掛けるつてなによそれ」

そんなことしないつてば、と希の発言に呆れたけれど、続く希の発言に私はせつかくつかんだトマトを滑らせた。急降下していくトマトは床に落ちて、ぐちゃつと潰れた。悲しいことになったトマトをしばらく眺めていたら、希がティッシュを渡してくる。本当にもう、と文句を言いながら、私は床を拭き

取って、ティッシュをゴミ箱に放り投げる。

「キスでも仕掛けてみたらええやん」

至近距離から投げたはずのティッシュはゴールインしなかった。希の言葉が頭の中でぐるぐると駆け巡るから。先生にそんなことできるわけないじゃない、しかもきつと彼女は困るに決まっている。どんな態度を取られるか、考えただけで恐ろしかった。話せなくなる、目も合わせてもらえなくなる、そんなことを想像しただけで胸が痛かった。どう考えても、いい方向に転ぶとは思えない。

「案外悪くないと思うんやけどな」

カードもそう言ってるで、なんてタロットカードをちらつかせる希。希の占いが良く当たることは長い時間一緒にいて痛いほど痛感しているけれど、こればかりはちよつと信用できない、なんて。そんなこと彼女には言えないけれど。できそうだったら、なんて小さな声で言ったら、希はにこりと笑った。

残りの授業なんてほとんど頭に入るわけがなかった。希の言葉は消化しきれずに胃の中でぐるぐると。消化不良を起して、ぐつと苦しくなる。放課後になると希は先生が来るまで一緒に待ってようかと言ってくれたけれど、断った。

誰もいない教室に一人。いつかの朝と同じように校庭をぼんやりと眺めていた。あの日と違うのは、校庭にいるサッカー部が部活の準備をしていること。準備運動を始めたサッカー部を眺めて、会議って何時に終わるんだろ

うと思った。長くなるかも、って言ってたしずっと「」でぼーっとしているのも限度がある気がして。会議が終わったら先生が教室まで来てくれるって言うてたけれど、図書室にでも行って少し時間を潰してこようかな。

\*

「…ん…せさん、」

ぐらりぐらりと身体が揺れて、目を覚ました。ぼんやりと見上げると、先生の姿。夢、見てるのかな。だつてすごく先生の顔が近い…こんな近くに…ふわりと甘ったるい香りがする。柔らかい感触。ああ、先生の唇ってこんなに柔らかいんだ。起きたら忘れちゃうんだなあ…

「…っ、は…絢瀬さん…っ!」

「…え?」

がたがたと大きな音を立てて先生が一気に離れていく。夢、じゃない…?え?あれ?嘘?本当に?顔を真っ赤にして、わなわなと私を見ている先生を見て、さっと血の気が引いていく。え、どうしよう、どうしよう。

「あ、の…その、」

「え、と…」

なんて言い訳をしたらいいのかわからなくて、視線を逸らした。希が余計なことを言うから…と心の中で希のせいにしたところで、先生には通用しない。気付いたら外はもう太陽が沈んだ後の、微かな光しか残っていない。だいぶ「」で寝ていたことに気付いた。

「先生…「」めんなさい…寝ぼけて…」

「…寝ぼけてしちゃったから許してって」ことですか?」

「…「」めんなさい」

ずっと先生の手が頬に伸びてくる。何もできずにその顔を見上げていたら、先生が笑った。見たことのないような笑顔で、背筋がぞくりとした。瞬きをひとつ。魔法がかかったように目が逸らせなくなる。本当は3秒ほどだったのかもしれないけれど、私には何分にも感じるほど見つめ合って、それから先生は私に近づいてくる。ふわりと香る先生の匂いに、目を閉じたら、そのまま唇を重ねられた。二度目の口づけ。さっきよりもずっとしつかり触れ合った唇はうんと気持ち良くて、ぎゅゅと目を閉じた。

「…っ、先生、」

「海未って呼んでください、絵里」

おでこをくつつけて、笑い合った。言葉にせずとも同じ思いなのが手に取るように伝わって、嬉しくて、口角があがるのを抑えきれなくて。

「海未」

初めて口にした先生の名前が、初めて呼ばれた私の名前が、宙にふわりと舞い上がるようで。好きです、と小さな声でぼつりと囁けば、同じボリュームで、私も好きですと返ってくる。ねえ、こんなに簡単なことなのね。あれほど言えないと思いつけてきた言葉を「」に「」にあつさり口にするだなんて思いもしなかった。

好きよ、海未。大好き。

「誰にも、秘密ですよ」

「わかつてるわ」

「東條さんにもですよ」

「…ばれると思うけど努力はするわ」

あの子、勘がいいの、そう言えばでしょうねと海未が笑った。やっぱりこの人は生徒一人一人をよく見ていると実感する。私が見てきた海未の先生像は間違っていないかったと一人頷けば海未が首を傾げる。なんでもいないと笑ったら、そうですかとふわりと微笑んだ。今まで見ていた笑顔よりもずっとずっとやさしい眼差し。絵里、と呼ぶ声がずっとずっと澄んだ声で。先生と私の、秘密の関係が始まった。

\*

「ねえ、海未」

「なんですか、つてちよつと、」

学校では相変わらずの距離感を図るようになった。希にはやっぱりすぐにばれたけれど、他の子たちにはばれていないみたい。生徒と教師、女と女なんてばれたら本当に学校をやめなくちゃいけないし、学校で会ってもくっつけないのがつらいところだけれど、週末には海未の家に遊びに行くようになった。毎週つてわけではないけれど、それでも十分だった。二人で借りてきた映画を見て、夜ご飯を馳走してもらって、家に帰る。それが私たちの休日の過ごし方。外でデートもろくにすることがないけれど、それも仕方のないことだつてわかっているから。

「先生は「こういふこと」したことないの？」

「あ…ありますよ、それくらい」

「…あるんだ」

「こういふこと」というのは映画でたまたま流れた少しえつちなシーン。そんな言っつほどでもないのよ。ただちよつとそういふことしてますよ、つていう描写なだけ。それでもしたことがあるつていうその言葉が思ったよりも胸にずしんと来て、声のトーンが下がる。

そりゃあ私より何個も上の大人なんだから当たり前じゃない、と自分で自分を納得させようとするけれど、どうも上手くいかない。やだ、子供みたい。

「絵里？」

「あ、ううん。なんでもないの」

海未は首を傾げるから、頬にちゅつとキスをしたら、誤魔化せるかなと思つてキスをした。へらつと笑つて見せれば、海未は顔を真っ赤にしてくれると思つたのに、神妙そうな顔で私を見てくる。何、どうしてそんな顔をするのよ。海未？と今度は私が海未に首を傾げる番だった。

「絵里、したいんですか？」

「…へ？なにを、」

真剣な眼差しに気圧されて、言葉を飲み込む。何をなんてすぐに理解できた。なによりもそういふことを海未が言つてきたことに驚いて何もアクションを起「せず」にいると、ひよいと持ち上げられて、ベッドに連行される。えつ、待つて、これつて…ちよつと、

「海未、待つて…」

「あ、もしかして違いました…？」

ぼすんとベッドに下ろされてから、海未を手で制したら、海未の表情が固まる。違つたの、いや違くないんだけど、どうしよう。どうしたらいいの、こういふときつて。

「あ、違くないんだけど、その…」

「はい…？」

「…心の準備が…」

心の準備、と口にしたら海未はきよんとした顔をしてからそうですね、と呟いた。怖いですか？との問いかけにこくと頷く。

そういうことに興味はあつたつて、実際にすると考えたら身体が硬直していくのが手に取るようにわかつて。普段話していると海未は意外と子供らしい顔を見せたりとかするから、あまり意識していなかったけれど、こういうときに大人なんだなと実感する。

海未がふいに近づいてきたから、ぎゅつと目を閉じた。唇にされると思っていたら、力を込めた瞼の上にされて、反射的にびくりと身体が揺れる。うっすらと目を開けると、海未はいたずらが成功した子供のようになにここと笑っていて、どきりとする。

そのまま海未はおでこ、鼻、頬、と顔中にキスを落としていく。早く唇にしてほしいと服を掴めば微笑んで、唇にキスをしてくれた。触れるだけのはずの口づけはどんどん深くなっていく、息がしづらくなっていく。入り込んできた舌を追いかけて、吸い付けば海未が声を漏らす。じわじわと身体が熱に侵されていく。

「…っ、は、」

「う、み…っ」

ぼんやりと海未を見上げれば、海未が目でいいですか？と語りかけてくる。こくりと首を振ると、海未が私の耳に触れる。形をなぞるように指が動いた後、ぬめりとした感触が耳に走る。びつくりして可愛らしくない声をあげたけれど、海未はふつと息を吹きかけてくるから、また喉から声が出る。

やだ、なにこれ。耳だけでこんなになっちゃうの？

耳の淵を海未の舌がなぞつて、吸い付くようになめまわされる。唇を噛んで、漏れる声を必死に抑え込めばそれに気付いた海未が耳から顔を離して、こちらを見た。

「あとになりますよ」

「…っ、でも」

「どんな絵里でも好きですから」

大丈夫です、と海未が私の頭を撫でる。なんでこんなにかっこいいことさっぱりと言っちゃうんだろう。すぐに恥ずかしがるくせに、こっぴどいときだけかっこいいの…？たまらなくドキドキするのは熱のせいだけじゃないってわかつてる。

海未の手が服に伸びる。前にボタンがついているタイプの服。どうして今日これを着てしまったんだろうと思った。海未の手が、ボタンを外していくのを見ていられなくて、視線を逸らしたら、首筋にキスをされた。

くすぐったさと、それとは違う何かと同時にやってきて、もどかしい。どくんどくと脈を打つ心臓の音を海未に聞かれたくないと思ったけれど、それは無理みたいで。服の感覚が薄れて、ちらりと目をやればボタンは全部外れていて。開かれた服。海未がじつと見下げてくるから、視線に耐え切れず腕で胸元を隠せば、海未が頬を膨らませた。

「とても綺麗ですから、見せてください」

「…っ、もう」

ぎゅつと手を握りしめられて、目を見つめてそう言われてしまえばもう拒否なんてできなくて。ずるいわ、と言うのが精いっぱいだった。海末はにこりと微笑んで。

電気のついていない、昼下がりの先生の部屋で、何をしているんだろう。ふとそんなことを考えたら、下腹部がじくりと疼いた。

海末の手が、下着の上から、胸に触れる。薄い水色の花が描かれたシンプルな下着。こんなことになるってわかっていたら、もっと可愛いものを着けてきたのに、なんてあとから文句を言ってみても仕方のないことだけれど。やわやわともどかしく動く海末の手。それだけでも気持ち良くて、呼吸がどンドン荒くなつていく。私、耐えられるのかななんてちよつと筋違いなことを考えたりして。

「っ、ふ…ん、」

はやく、とおねだりをしてみれば、海末は頬を高揚させて、絵里こそずるいですよ、と呟いた。何がずるいのよ、と開こうとした言葉は海末の手によって外された下着に意識が行って、飲み込んでしまったけれど。直接、海末の手が触れただけで身体がぴくりと動く。しなやかな海末の指が好きだと思ふ。

海末の部屋には、いくつもの写真が飾られていた。それは袴を着て弓を射る姿や、着物を着て舞踊を踊る姿、書道をする姿など様々だったけれど、どれも見たことがなくて、いつか見てみたいと思う。きつと海末の指の繊細さはそういうところに通じているんだろうと。

海末の手によって形を変えられて、もう私は海末の顔が見れなくて、ぎゅつと目を閉じてみたけれど、目を閉じたらかえってどんな動きをするのかわからなくてより一層反応してしまふことに気付いた。海末の指が、胸の先端を掠めただけで腰を浮かしてしまふくらいだった。じわじわと海末に侵食されていく、身体も心も。

「……っ、あつ、や……」

胸を吸われるだけでぞくぞくとした何かが身体を駆け巡って、どうしようもなく胸が苦しくなる。ああ、もうだめかもしれない。恥ずかしさでどうにかなつちやいそう。がくがくと腰を揺らせば、海末が絵里、と私を呼ぶ。なに、と発した声はもうひどく弱弱しくて自分で笑ってしまいそうだった。

「可愛いです」

だから、そういうのやめてつてば。なんでそんなにかっこいいの。さつきからずつと息しづらいののに、海末は追い打ちをかけるように言葉を滑らせて行く。ぽたりと溢れた涙を海末は舌で舐めとつて、しよっぱいですなと笑う。

はっ、は、と荒い息を繰り返していた私に、海末がいいですか？と尋ねてくるから、こくりと首を振った。もうすっかり色を変えているであろう下着を海末が外す。恥ずかしさでどうにかかなりそう、顔を手で覆う。

「うみい…うあんま、みないで…」

「優しく、します」



「…そうですね」

海未がふわりと笑ってから、あ、と眉を顰める。何、と服をひっぱれば未成年に手を出してしまいましたなんて、今更過ぎることを言いつて頭を抱える。大丈夫、と海未の手を取れば、海未がへ？と私を見る。

「だって、秘密じゃない。全部二人だけの秘密なのよ」

誰にもばれないし、誰にも邪魔させない。私たちだけの秘密なの、全部全部。愛し合っていることも何もかも。

「隠し事をするのは…嫌い？」

「…いえ」

明日になれば、私たちは生徒と教師。週末になれば、その関係は泡となつて消えるのよ。くすくすと笑い合つて、海未に好き、と囁けば、海未も同じ言葉を伝えてくれる。

この部屋で起きたことも、明日腰の痛みと戦う理由も、先生の背中に刻まれた爪痕の意味も、全部全部、誰も知らない。



# -あとがき-

こんにちは！みいです！

773ちゃんと海未ちゃん誕生日だしえりうみ本出したいよねって話になったのが全ての始まりです。

本当に完成するのか不安だったのですがこうして形になったのです…(笑)

773ちゃん色々とありがとう！

私は絵里ちゃん受けが好きなので今回もうみえりになったのですがえりうみも好きです。

もうどっちでもいいですよ2人が可愛いので。

えりうみうみえり増えてほしいです。

今度本にできる機会があったらぴゅあぴゅあ二人も書きたいなあ、なんて。

お手に取っていただきありがとうございます！

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

みい\* 【pixiv:6818165】 【Twitter:@htkimgr】

はじめまして！773です！

このたびは本誌を手にとっていただきありがとうございます。

ずっとえりうみ本だしたいなと思っていて今回やっと出せました。

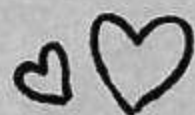
お互いはじめての同人誌ということであたふたしましたが…

少しでもえりうみが増えたらいいなと思います♡

またえりうみ本だそうかと思っているので(\*^^\*)

そのときまで！では！！

773 【pixiv:6861602】 【Twitter:@yuri\_\_773】



## ひみつなふたり

発行日 2015/3/15

発行 さくらはなび

発行人 みい\* 773

印刷所 オレンジ工房 様

☆18歳未満の購入、閲覧は禁止です☆

